

桜庭康喜さんの労作『消えたマチ 生まれたマチ』が訴えるもの

山内亮史

読んでほしい本のことを書く。

もう十二年ほど前になろうか、元名寄市長の桜庭康喜さんと旭川空港で出会ったことがあった。私は出掛けるところで、彼は帰ってきたところであった。立ち話の中で、彼が全国全市町村を訪問中であることを知った。その発想も驚きだが、実行に移したことがもつと驚きで、さらに、それを成し遂げ、全記録を出版したと聞いたときは、肅然として襟を正す思いがした。

その記録が北海道地方自治研究所の協力を得て出版された『消えたマチ 生まれたマチ』で平成の大合併に揺れた市区町村の本音』である。

平成九年一月六日の沖縄を皮切りに、八年六カ月間。訪問活動は五〇回、訪問日数は六一八日に及び、資料整理に三年、文章作成に一年、校正作業に一年。訪問開始から十三年を費やした文字通りの労作である。

訪問活動はこの数字に表れない苦労の連続であることを随所にうかがうことができる。訪問先のアポイントをとる作業（大抵の場合、首長である）、全く見知らぬ市町村の庁舎の位置確認など。

Ⅱ巻目で、香川県の市町を訪れたときなど

は、「悪戦苦闘、発熱と悪寒の闘いだだった。訪問した際のメモを見ても、多くの市町で懇談の内容が記録されていない。訪問終えた日ごとに宿泊所でパソコンに打ち込むのだが、頂いた名刺、首長の署名を見ながら思い出すことができないもの、懇談の内容を思い出すことが見える。

著者の視点を整理してみよう。彼のこの活動中、一〇九市町村は合併で消滅している。そして、夕張市も財政破綻をきたした。著者は自治体側の責任を認めつつも、「ハード事業中心の振興策を推し進めた霞が関の関係省庁と、国政を預かる政治家の姿勢と関与ではないか」と認識し、「昭和の大合併」の教訓が生かされていなかったという視点を打ち出している。

すなわち、昭和の大合併には、最低一自治体に一校の中学校の設置、市町村消防の創設などの目標が、まがりなりにもあった。にもかかわらず、これを経験した自治体は今、「本庁舎」所在地以外の地域は例外なく過疎化がすすみ、コミュニティの活力が失われているというのである。

このネガティブの視点を著者が持つこと

によって「平成の大合併」の検証の旅が意義を持つのである。検証の結果を著者はいう。平成の大合併には「明確な目標」はない。それは国の財政政策の失敗を地方自治体に責任転嫁する、単なる財政規模の拡大、財政破綻の回避を求める「理念なき合併」であり、都市部や、小規模であっても原子力発電所立地で財政的に余裕のある自治体は合併をせず、実体は「貧民連合」の強制で、木を見て森を見ない愚策である。著者は、こうした結論を、千人を超える首長の、時として自嘲気味に、また自慢気に、そして諦観を含んだ面談から引き出しているのである。

たしかに、時代や社会状況の変化に対応して、合併という形で行政区域や制度の改革は必要である。しかし、私たちは今そこに、かつて経験したことのないような「価値」の転換を内在的・内発的に付け加えなければならぬ時代を迎えている。その最大の課題は、著者の最後のあとがきという、「居住地を愛し、終の棲家を定めて生きる住民が、自らの意思で『身の丈にあった』地域社会を創る意識をしつかり持つことができる施策を積極的に進めることでは、と考える」ことにある。個人的には、福島県矢祭町、山口県光市などが著者らしい観察眼が活きており、面白く読んだ。

名寄市長を半ばにして国政に二度挑戦し、失意と無聊の時をかかる宿志を遂げるために、かの伊能忠敬のごとく足を運んだ桜庭さんは、いま己の人生に輝かしい勝利を得た。

八やまうち りょうじ・旭川大学学長